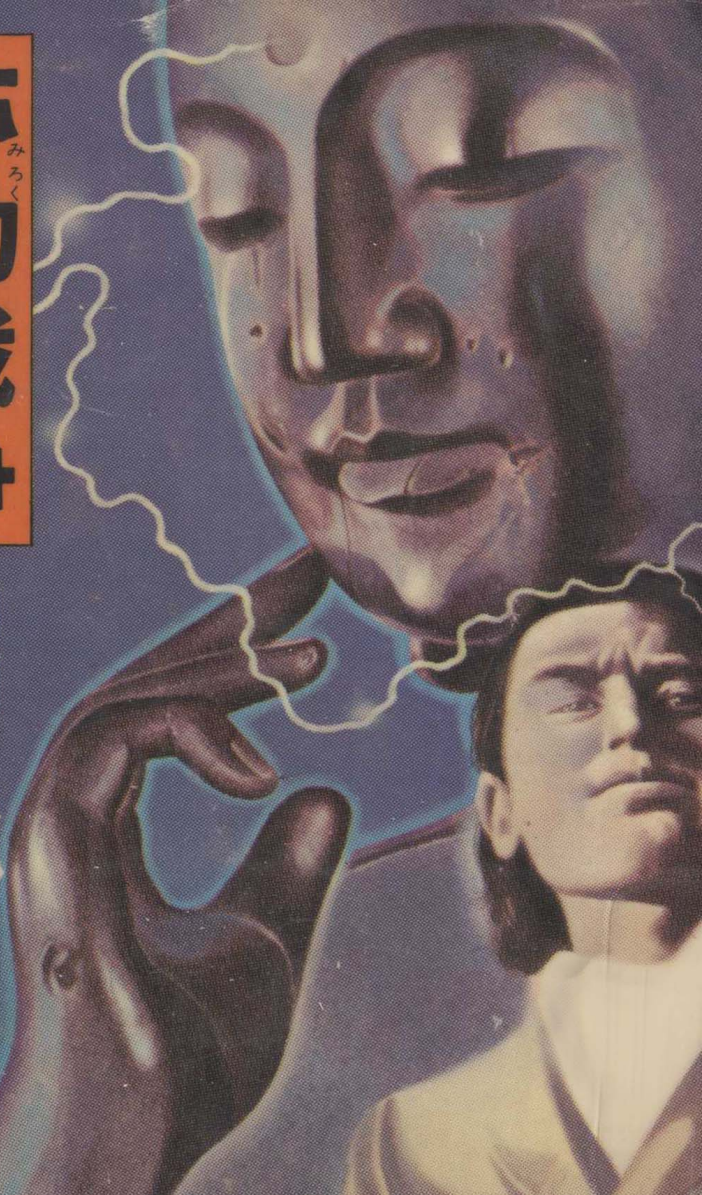


彌勒戦争

みろく

山田正紀

角川文庫



昭和五十三年一月三十日 初版発行
昭和五十三年四月三十日 再版発行

定価は、カバーに
明記してあります

角川文庫

ろく 戦争
み 弥



著作者

山田正紀

発行者

角川春樹

印刷者

村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
●一〇二●東京③一九五二〇八

株式会社 角川書店

電話東京五七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

旭印刷・多摩文庫

0193-144603-0946(0)

み　ろく　戦　争
弥　勒

山　田　正　紀

角　川　文　庫

4020

目次

第一章 修羅

九

第二章 独覺

壹

第三章 声聞

一四

第四章 弥勒

一七

解説

かんべむさし
二四

重く空を閉ざした暗鬱な雲は、雨をいっぱいにはらみ、しかし、未だ一滴の水も地上に落としてはいなかった。あるいは地を這い、あるいは瓦礫の下を蠢いている生命の多くが、水が欲しいという一念に支えられ、かろうじてその火を保っているというのに、雨はいっかな降ろうとしなかった。

この狭い島国ではついぞなかったことだが、遠くに、黒く地平線が見えていた。その地平線にいたるまでの大地は、焼けたたれた瓦礫に埋めつくされ、むきだしになった工場の鉄梁と鉄棟だけが白く卒塔婆のように残されていた。

静かだった。

今、この瞬間にも、夥しい数の生命が消えようとしているというのに、死者を送る誦経の声も、親しい者の死を悼む泣き声さえも、そこには聞こえていなかった。時おり、焼け落ちる家屋が物理的な音をたてることはあったが、この恐ろしいほどの静寂をかき乱すにはその音はあまりに非力だった。

動いている者がまったくいないではない。

揃って皮膚をボロ切れのようにたらした一群が、ヨロヨロと風景をよぎっていった。血に染まり、肉塊のようになりながら歩いていく男もあった。全身を——多分、内臓までも焼け爛らせた

女が、高い、澄んだ笑い声をあげながら歩いていった。そして、あちこちの倒壊家屋の下から、水をくれ、と手をのばす男女がいた。

だが、それらの様々な動きは、まったく生命を感じさせることがなかった。そのはずではあった。この都会そのものが、そっくり幽界に籍を移してしまっているのだから。

「へかれ」だけが生きていた。いや、そこが幽界だったからこそ、「へかれ」が生を享けることができたのかもしれない。

「へかれ」の存在は聴くことから始まった。ゴボゴボという呪詛に似たつぶやきが、「へかれ」に滲んでいき、その存在を混沌のなかからしだいにえぐりだしていった。が、長い時間、「へかれ」はその音のうえにたゆたっているだけで、音と己とを判別することさえできないでいた。

「へかれ」の誕生を促したその音が、爆風に穿たれてできた巨大な穴にたまった重油が、メタンガスを噴きだしてたてているものなどとは、知るよしもなかったのである。

そして——ふいに、視覚をえた。

「へかれ」は自分が見ているものがなんであるのかまったく理解できないでいた。興味を持とうとさえしなかった。曇天、廃墟、熱に膨脹した死体……そんなものに気をとられるには、あまりに誕生の驚きが大きすぎたからだ。

が、「へかれ」自身は、それを誕生とは考えてはいないようだった。曖昧模糊としていたものが、ゆっくりと凝集していき、そこに自我のようなものが浮かびあがってきた時、

——還^{かえ}ってきた。

という言葉が最初にきらめいた。

——五六億七〇〇〇万年がようやく過ぎたのだ。

へかれは自分が呪文^{じゅもん}のように繰り返している“還ってきた”という言葉の真の意味をまだ掴^{つか}めないでいた。掴めないではいたが、その言葉はへかれを酔わせ、歓喜で身を震えさせるのだった。

へかれの意識は、すでに明晰^{めいし}なものになっていた。その存在にも、力がゆきわたっていた。

今はまだ行動すべき時だった。

へかれは身を起こした。

ふいに荒野を吹き過ぎていった一陣の風が、様々な遮蔽物^{しゃへいぶつ}に行路を阻まれ、廃墟のあちこちに小さなつむじ風をつくった。壁と屋根だけを残してかろうじて建っていた一軒の家屋が、その風に均衡を崩され、ひしゃげて瓦解^{がかい}していった。骨を鳴らしているような音が廃墟に反響^{こだま}した。

へかれが歩きだすのとほとんど同時に、暗い空が雨を落とし始めた。粘りつく、黒く汚れた雨だった。

遠くに、円屋根の鉄梁をむきだしにしたドームが見えていた。

第一章 修羅

排出物のおいと、男たちの体臭がないまぜになったすさまじいほどの悪臭が、雑居房に重くよどんでいた。眼を閉じたところで、その臭いを忘れることはできない。忘れることはできないが、いくらかでも耐え易くはなるようだった。

しかし、彼——結城弦が、壁に背をもたせかけ、眼を閉じて座しているのは、決して悪臭に耐えるためではなかった。それは、寺で育てられた結城の、一種の習性のようなものであった。

実際、屎尿桶しにようけつのアンモニア臭も、粗野で猥雑わいざつな同房の男たちも、結城には耐えなければならぬというほどには気にならなかった。耐えるということを言うなら、結城は生まれてこの方それ以上は考えられないほどの峻烈しゅんれつな運命さだめに耐えてきたし、その運命はこれからも耐え続けていくことを彼に要求しているのだ。いまさら、雑居房の臭気ぐらいのことで、なにを耐えなければならぬと言うのか。

——その運命さだめ、か……。

結城の唇くちびるにフツと苦笑が浮かんだ。

運命とは聞こえのいい言葉だ。なにか崇高すうこうで、悲劇的な響きさえ含んでいる。実際には、それは、運命というより、むしろ体質と呼んだ方が相応ふさわしいようなことなのだが。

——人間というやつは、自分を言葉で飾りたてずにはいられない動物らしい。

結城の苦笑は、ますます皮肉な、歪んだものになった。

ふいに声がかかった。

「兄さん、ニヤニヤ笑って、なにか面白いことでもあったのかね」

結城は眼を開けた。

こがらな、魯鈍そうな表情をした若い男が眼の前に立っていた。今朝入ってきたばかりの新入りで、大声で自己紹介をしていた男だが、むろん、結城は名前など覚えてはいなかった。

結城の眸に、どんな表情も浮かんでこないとなると、

「耳がないのか？ え？ 返事ぐらいしたらどうだ」

男は居丈高になった。

最初から、いんねんをつけるつもりで話しかけてきたのだろう。自分が、どこにでもいる三下ではないことを、雑居房の先住者たちに思い知らせようという肚らしかった。瘦せた、いつでも憂鬱そうに黙りこんでいる結城は、デモンストレーションにはいかにも格好な相手に思えたに違いない。

「おい、なんとか言ったらどうだ」

男は腰を落として、結城の胸ぐらを掴もうとした。掴もうとはしたのだが、なにか電気に打たれてもしたかのように、その手を宙に止めた。

男はとまどっていた。結城の自分を見る眸にとまどったのである。

男がなまじ喧嘩慣れしていたのがいけなかったのかも知れない。結城の表情が、たとえば怯えとか、怒りとか、闘志というような、男にとってなじみの深いものであったら、彼もそくさに次の行動に移ることができたろう。だが、結城の眸には、男の思ってもいなかった表情——悲哀、それも身体の芯まで凍らせてしまいそうな悲しみの色が浮かんでいたのである。

「その若いのかまうな」

誰かがどすのきいた声で言った。

結城の表情にすっかり戦意をそがれてしまっていたらしく、その声に救われたかのように、男は無言のまま自分の場所へと帰っていった。

結城は再び眼を閉じた。

——滓だ……。

なんの脈絡もなく、そんな言葉が結城の頭に浮かんた。誰が滓だというのか。彼にいんねんをつけようとした男か、それとも、この雑居房に入られている全員がそうだというのか。

——人間というやつがどうしようもなく滓なのだ。

結城は嗤った。無意味な生を営々と送っている人間という生き物に対する憐憫、そして、それを痛いほどに感じながら、彼らを救ってはならないという掟を破ることもできない自分に対する無力感——その双方が彼をして嗤わせたのだ。むしろ、自嘲にちかかった。

不発に終わった惨めなさいかに、雑居房の住人たちは不機嫌に沈黙した。その白けきった空気に迎合するように、なぜやいな流行歌が房の壁を通して聞こえてくる。

「星の流れに、身を占って

何処をめぐらの、今日の宿……

この歌を聞くと、きまって結城の頭に一人の男の貌が浮かんでくる。結城と同じように、人間は滓でしかない、と断じ、しかし結城と違って、その滓の上に金の力で君臨しようとした男の顔が……。

——自殺する数日前から、あの男はいつもこの歌を口ずさんでいた、と誰かに伝えても多分信用はされまい……。

結城はそう思う。あいつが小さな声でこの歌を歌っているのを聞いた時、おれでさえも自分の耳を疑ったのだから……アブレ・ゲールの病理的合理主義者、ヤミ金融の学生社長と評されていたあいつが歌うにしては、この歌はあまりに恨みがましく、めめしくはなかったろうか。多分、こんな歌を歌っているあいつの姿など、見るべきではなかったのだろう。あの時から、おれは自分の仕事に疑問を持ち始めたのだ。本当に、こいつを自殺に追いこむ必要があるのだろうか、という疑問を……。

——だが、結局、おれは自分の仕事をやりとげた……

結城の脳裡には、青酸カリを飲み、机の上につつぶしているあの男の姿が焼きつけられていた。机の上に残されていた彼の遺書——死体は焼却し、灰と骨は肥料として農家に売却すべし、そこから生えた木が、金の成る木か、金を吸う木なら結構である……そこには、そう書かれてあったという。

ヤミ金融へ光クラブの学生社長、山崎晃嗣を自殺に追いやったのはおれだ。あの冷徹な男が、ついに最後までその事実がつかず、自らの意志で死を選んだと信じ、青酸カリを飲んだのだ……結城は唇を血の出るほど噛みしめていた。

「結城弦——返事をしろ。釈放だ」

鉄格子のむこうから担当の声がかかった。

驚いて、結城は眼を開けた。聞き間違いではないかと思った。姓名や年齢をおさなりに尋ねられただけで、まだろくに取り調べも受けていないというのに……。

が、現実には、扉がガチャガチャと開かれて、担当が不機嫌な顔をのぞかせているのだ。雑居房ががぜん騒がしくなった。

「どうして、あいつだけが出られるんだ」

「取り調べも受けてへんやないか」

「いんてりは特別あつかいか」

むろん、担当はそれらの声にとりあおうとはしなかった。出る、と結城にむかって顎をしゃく
る。

うっそりと立ち上がって、結城は雑居房を出た。もちろん獄舎に入れられているのが好きなわけではないが、だからといって、出られて嬉しいとも思わなかった。あちらから、こちらへ身を移した——結城にとっては、ただそれだけのことなのだ。

短い拘留期間ではあったが、やはり雑居房の暗がりに慣れた眼には、五月の陽ざしは眩しすぎるようだった。緑がむせかえるように濃くなっている、葉をそよがせる風が、ひどく爽やかだった。

警察署の建物を出た結城は、しばらくその風に身をさらしていた。

「五月ももう終りだな……」

ボソリと独り言をつぶやくと、結城は舗道を歩きたそうとした。別に誰が待っているわけでもないが、とにかく下宿に帰って大の字になって寝てやろうと思ったのだ。

「結城さん……」

女の声が彼を呼び止めた。

振り返った結城の眼に、銀杏の木蔭から一人の女が歩き寄ってくるのが映った。

「きみか……」